

# パン屋、ジビエ料理に挑戦!! (10)

文 木村安兵衛

text by Yasube Kimura

た

ぬきに化かされ、シカやイノシシは目の前に現れない猟期の始まりでありました。獲物の獲れない鉄砲撃ちは狩人などではなく、もはや動物愛護団体になってしまった感があります。そんな中、北海道の釧路の山中に鉄砲を担いで入るのであります。

北海道は寒さが厳しく、雪深いため他の県よりも1カ月早い10月から猟期が始まります。11月半ばに北海道に入るといことはボヤボヤした鈍くさいシカは撃たれてしまっていて、すばしっこく逃げるのが上手なシカしか残っていないことを意味しています。

冬に備えて牧草を育てている牧場にはシカは見当たりません。林道を車で流してもシカを発見することもできません。ひよつとするとシカや熊は撃ち尽くされてしまつて、来年から全ての野生動物は天然記念物として手厚く保護されてしまうのではないだろうか? などという想像が出てきてしまう程の閑散とした風景が広がっているのです。

キタキツネの姿すらありません。「いないねえ」私に北海道の猟を教えて下さる師匠も首をかしげています。

山に入つて3時間が経過しました。突然目の前を子ジカ、雌ジカの群れが猛スピードで横切つて行きました。何にもできませんでした。身動きをすることもできずにただ見守つただけでした。

それから1時間が経過。前方80mぐらいにシカがおります。今度は慌てて鉄砲を手に車から飛び降ります。勢いが良すぎたのでしょうか、音に驚いたシカは逃げて行つてしまいました。

1時間が経過。前方右手に生える杉の木の下にシカがおります。今度こそはそつと車から出ます。シカはまだこちらに気づいておりません。よし!と思つた刹那、きちんと鉄砲を構えると自分の体がシカに見つかつてしまうことに気づきます。ここは銃をサウスポーター持ちにして撃ちます。ドコーン!という音とともにシカは走り去つて行きました。

「俺ならもう2頭は獲つてるぞ」冷たい声が師匠から飛んできます。

重苦しい空気の中、1時間が経過します。

今度は右手にすつくと仁王立ちになつてゐる大きな雄シカがおります。

眠っていた所に車の音がして寝ぼけて立ってしまったのでしよう。今度は車の陰に回り込みます。スコープで捉えます。スコープ越しの雄ジカは3段にもなつた見事な角がついています。

激しい鼓動がこめかみを叩く振動で銃が安定しません。息を吐き続け肺の空気がなくなつた瞬間手の揺れが止まりました。引き金を引くとトーン音とともにシカが逃げ出します。「あー!はずしちやつた!」と自分の練習不足を呪つた瞬間、シカはもんどりうつて転がつたのでした。

体重 130kgの立派な3段角を持ったシカでした。後悔と興奮が入り混じつた初体験があつけなく終わりました。

## Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブルーランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー 1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2017年現在29店舗を数える。

